

帰化人と聖徳太子

平野邦雄『帰化人と古代国家』（吉川弘文館、一九九三年）

1. 隋外交の展開

小野妹子の派遣

推古天皇十五年（六〇七）秋七月（陰曆）、「日本書紀」にただ一行、「大礼小野臣妹子を大唐に遣す、鞍作福利（くらつくりふくり）を以て通事となす」とある記事は、聖徳太子の対アジア政策、ひいては六世紀末の困難な政局を主導しようとする太子の決意を知るうえで、まことに重要な意味を秘めている。

とくに国際政局と国内政治の展開が不可欠に結びついている古代にあたっては、太子の外交路線を知ることが、国内諸勢力に対し、太子がどのような改革を指向したかを知ろうとするうえでの重要な要素ともなるろう。

太子の事業のうち、「十七条憲法」や『三経義疏』が、まず文献のうえで疑問点のあるにくらべると、隋との外交については『日本書紀』と『隋書』の双方に、それぞれはつきり対応する記録があつて、正確な史実を伝えているという意味でも、太子を知るには、まず外交からはじめるのが賢明である。

では、いまの『日本書紀』の記事にかえらう。

はじめて遣隋使となった小野妹子は、近江国（滋賀県）滋賀郡小野村から出身したらしい。たしかに、

のちになつてここには小野神社があり、小野氏の五位以上のものは、春秋二回の祭りに、京からこの近江の氏神へ往来することを許されていた。もともとこのあたりは帰化人の多いところである。

妹子も彼らから影響をうけたかもしれない。彼の子孫も、唐・新羅・渤海などに、使者としてつかかわされたものが多い。福利は鞍作氏だから、もちろん帰化人である。そのため通訳に任じられたのである。鞍作氏には有名な止利仏師もいる。

さて、妹子は、あけて十六年四月に帰国する。このとき有名な隋使の裴世清ら一二人が、いつしよに筑紫(北九州)に着いた。そして朝廷からつかわされた難波吉士雄成(なにわのきしおなり)に迎えられて、難波(大阪府)に向かう。雄成も帰化人で、この氏は摂津(大阪府・兵庫県)一円に住居する外交専門の家柄である。

使人を迎えるため、難波にはあらかじめ迎賓館が設けられていた。すでにあつた難波の三韓館のほかに、わざわざ新設されたのである。

はなやかな隋使の歓迎風景

雄成に案内された一行は、瀬戸内海をひと月あまり航海して、六月に難波津に入港し、江口に出迎える満艦飾の船三〇隻のはなやかな歓迎風景のなかを、無事迎賓館にはいった。接待係は、中臣宮地連麻呂(なかとみのみやじのむらじまる)・大河内直糠手(おおかわちのあたいぬかで)・船史王平(ふなのふびとおうへい)の三人で、このうち糠手・王平の二人もやはり河内(大阪府)の帰化人である。彼らによつて、使者は二カ月足らず難波で厚遇され、八月にはいと、飾馬七五頭を仕立てられ、飛鳥京(奈良県高市

郡明日香村)に向かう。おそらくその馬には、金銀のすかしぼりのある鞍金具がおかれ、馬の胸や尻の皮ひもには、雲珠や杏葉・馬鐔などがかざりつけられていたであろう。

難波を出発した一行のはなやかな行列は、ひとまず大和城上(しきのかみ)郡の海石榴市(つばきいち、奈良県桜井市)の街区にくりこむ。ここで朝使額田部連比羅夫(ぬかたべのむらじひらぶ)の礼辞をうけたが、それは使人らがいわば「観閲式」を挙行したのである。繁華な市のちまたに集まった人びと……大和の諸豪族や農民たちは、この大陸の使者たちの行列に目をみはり、大いに威圧されたことだろう。それは百済や新羅の使者ではなく、まさに「隋帝国」の使者なのであった。宣伝効果満点というところである。おそらく太子は、それを計算し、歓迎行事を組んだにちがいない。

このあと、はじめて使者の一行は、国書奉呈のため、宮廷に参内し、物部依網連(ものべよさみのむらじ)らに先導されて、推古天皇に使いの旨を言上する。「大唐の国信物を庭中におき、裴世清みずから国書を持ち、両度再拜して使いの旨を言上した」と、『日本書紀』には書いてある。ここで物部氏の一族がでてくるのは注意を要する。依網連は河内の住人である。蘇我氏に滅ぼされた物部一門がここに太子によつて登用されたとみてよい。

天皇の左右には、皇子・諸臣らがならび、ことごとく「金の髻華(うず)」を頭につけていた。これはちやうど四年前、聖徳太子が定めた「冠位十二階」の制度によつて、冠位に応ずる色別の繩でつくった内冠帽に、金銀製の外冠飾をつけていたありさまをさすのであろう。衣服もみなこの冠にあわせた錦や綾・羅のものを着ていたという。冠位制にもとづく公式の服装を着用したのは、これがはじめてのことであった。

ひきつづき、宮廷で供宴があり、九月には、ふたたび難波で別れの宴がもよおされた。そして同じ月の

うちに、使者は帰国の途につくのである。

本番の文化輸入

これは推古天皇十六年(六〇八)九月のことであり、裴世清が来日してから、まさに半年を経過している。この半年は、国内政治にもじゅうぶん利用された。示威と宣伝の効果は上がったであろう。そしてここに、小野妹子はふたたび遣隋大使として、小使の吉士雄成、通事の鞍作福利をともなつて渡海する。この三人は前回につづく外交の老練家であるが、今回はこの練達者にそえて、いよいよ八人の留学生・留学僧が送りこまれる。ひとたび打開された外交路線にのつて、本番の文化輸入へと計画は前進したのである。この八人の新鋭の知識人は、倭漢直福因(やまとのあやのあたいふくいん)・高向漢人玄理(たかむこのあやひとげんり)・新漢人日文(いまきのあやひとにちもん)・南淵漢人請安(みなぶちのあやひとしようあん)らですべては漢人つまり帰化人であり、彼らこそ数十年ののち、大化改新の立て役者となる人物である。太子の計画に狂いはなかった。

妹子は、推古十七年九月に帰国する。他の留学生たちは、そのまま中国にとどまり研鑽をつんだ。

『日本書紀』で、最も確かな遣隋使の記録は、以上に述べた六〇七・六〇八年の二回であり、隋使は、六〇八年に一度来日したことになる。

『隋書』の見聞

それでは、『隋書』ではどうだろうか。「倭国伝」によると、倭王多利思比孤(たりしひこ)は、大業三年

(六〇七)、使いをつかわして隋に朝貢し、これに対し煬帝は、翌年文林郎裴清を倭国につかわした。裴清は百濟をへて、竹品にいたり、南のかた耽羅島(濟州島)をのぞみ、都斯麻国(対馬)をへて、一支国(彦岐)に達し、さらに竹斯国(筑紫)に上陸する。そしてさらに東に転じ、秦王国(周防国か)を通過し、十余国(瀬戸内海ぞいの国ぐに)をへて、海岸(難波津)に着くのである。そして、筑紫から東の国ぐには、すべて倭(大和)に属するとしるしている。その見聞はまことに正確である。

さて、難波に上陸したとき、倭王は阿輩台(『北史』には何輩台)をつかわし、数百人の兵士たちに儀仗を設け、鼓角を鳴らして一行を迎えさせ、のち一〇日たつて、また可多毗が二百余騎を従えて郊勞(町はずれまで出迎えて勞をねぎらう)し、使者はそれから都にはいり、倭王と会見したという。

この会見で、倭王は「いまことさらに道を清め、館を飾り、もつて大使をまつ」と、周到な歓迎準備を行なったことをのべている。会見が終わると、迎賓館で宴を設け、使者をつかわし、産物を贈った。

このように、『隋書』の記事は、まったくよく『日本書紀』のそれと一致する。遣使の年次はもちろん、難波に上陸したのちの行動もよく符合する。難波に迎えた何輩台とは、掌客使大河内直糠手のことと思われる。「何」は「大河内の「河」の一字をとったのであろうし、「輩台」は「糠手」の音をなまったものである。一〇日後に使者を迎えたという可多毗は、一行が難波から海石榴市(つばきいち)にいたったとき、礼辞をのべた額田部比羅夫のことである。カタビは又カタベの音をうつしたものである。

『日本書紀』によると、小野妹子も、隋では蘇因高といわれていた。「蘇」は、「小野」の「小」の一字の音をとつたもので、「因高」は「妹子」の音のなまったものである。

ともかく、『隋書』と『日本書紀』が、人の名まで一致することは、ほとんど史実に誤りがないことを証

している。

周到な太子の計画

このように事件の経過をたどってみて、痛感されるのは、聖徳太子が隋と通交するには、あらかじめ周到に計画し、準備していたということである。二回の遣使の構成員を慎重に配置し、しかも一、二回のそれを質的にちがえ、適材適所、新鋭の帰化人をふんだんに登用した。また隋使を迎えるにあたっては、じゅうぶんの歓迎準備をととのえるところにも、演出効果を考え、歓迎の一大示威を展開して、隋との直接通交の威力を、国内政治のうえにじゅうぶん利用したのである。

よくみると、遣隋使を派遣した時期そのものが、じつは正確に計算されていた。聖徳太子の東アジアの国際情勢に対する読みの深さはおどろくべきものがある。もし外交上、利用すべきこの絶好機をのがしたならば、隋との通交はとうてい成功しなかつたであらう。しかもあとでみるような国書の内容においては、なおさらのことである。

それでは、その好機とはいったいなんであつたか。

2. 巧妙・明確な外交姿勢

隋と高句麗の死闘

隋が中国を統一したのは、五八九年のことである。そして勢力強大となった隋の文帝は、五九八年、朝

鮮三国の対立に乗じて、水陸三〇万の大軍を投じ、高句麗遠征を企てた。しかし陸路からの軍は、高句麗の強固な防衛によって、遼河の線でくぎづけにされ、そのうえ長期の雨で、補給は困難となり、疫病がはやり、ついに高句麗によって撃破されてしまう。また山東半島東萊を發した水軍も、海上で大暴風雨に会い全滅する。

このようにして、第一回の高句麗遠征は隋の完敗に終わった。

『隋書』によると、日本のはじめての遣隋使は、開皇二十年(六〇〇)のことだという。これは推古天皇八年にあたるが、『日本書紀』には記録がないし、このときの倭王のよび方にもよくわからないところがある。そこでこれはいちおう不確かな遣隋使記録として、あずかっておいた。しかし事実である可能性はある。もしそうならば、その時期は隋の完敗の直後であり、まさに再軍備にとりかかったばかりのところである。

このあと、高句麗は反攻にでて、六〇七年には百済の辺境地方を、六〇八年には新羅の北方を攻め、南を牽制するとともに、主力を北において、隋の侵攻にそなえる。いっぽう隋も、煬帝が六〇五年に即位すると、第二回遠征の大軍の準備にはいる。いま見たところの聖德太子の六〇七年と六〇八年の二回の遣隋使は、まさにこのときにつかわされたのであった。

けつきよく、六一二年、煬帝は遼東から高句麗への第二回目の侵入を開始する。じつに戦闘部隊一三二万といわれ、輸送部隊もほぼそれと同じく、水軍も淮水と長江の河口を發し、数百里の隊列を組んで、平壤へ向かったという。文字どおり、隋の国力をかけた一大侵攻作戦であった。

ともかく、このような大戦備の渦中に、日本の使者はおもむいたのである。しかも隋はふたたび敗れる。この失敗が事実上の隋帝国の運命をきめた。このあとくりかえし侵略したとするが、みな失敗し、隋はつ

いに六一八年、滅びるのである。

『日本書紀』によると、隋の滅亡の前もう一度、推古天皇二十二年(六一四)に、犬上御田鍬(いぬがみのみたすき)らが隋につかわされたのである。この場合は、『日本書紀』にだけ記載されてあつて、『隋書』にはない。未確認ではあるが、その年はあたかも、隋の第三回目の高句麗遠征の年にあつてゐた。

巧妙なかげひき

このようにみると、遣隋使は、いちおう都合四回あつたことになるが、それがみな、隋と高句麗の激突のさなかにあつてゐた。煬帝とすれば、高句麗を征するには、その背後にある百濟、さらに百濟を支援する日本を、あくまで味方につけておかなければならない。高句麗を南から牽制させることがぜひ必要なのであり、すくなくとも日本を敵にまわせば不利をまぬがれなかつた。このすこし前、推古天皇十一年(六一三)、日本は来目皇子(くめみこ)に、二万五〇〇〇の軍を授け、筑紫に進駐して南鮮出兵を企てたという記事があるではないか。

いっぽう、高句麗にとつても、日本とは事をかまえないことが肝要であつた。南からの、とくに新羅の脅威に悩まされてゐたからである。だから、高句麗王は、推古天皇二十六年(六一八)、隋の煬帝の軍三〇万を破つたことを大和朝廷に告げ、俘虜や鼓吹などの戦利品を贈つてゐる。一つの示威であつたかもしれない。

聖徳太子はこのような国際関係の帰趨をつかみ、遣使の時期を正確に計算してゐたとみななければならぬ。太子は明敏にも、この時期をのがさなかつた。一見、太子の「自主外交」は冒険であり、非現実的に

みえる。しかしある程度の危険はあつたにしても、それがみごとに成功したのは、それだけの必然性があつたからである。

自主外交の中身

「」でもう一度、いわゆる「自主外交」の中身をみてみよう。

『隋書』によると、六〇七年の遣使のとき、小野妹子は、「聞く海西の菩薩天子、重ねて仏法を興すと。故に遣して朝拝せしめ、かねて沙門數十人、来りて仏法を学ぶ」と述べたという。この口上書が、妹子が述べたことを忠実に記録したものであれば、国書の調子とはかなりちがう。そこには煬帝に「朝拝」し、来たりて仏法を「学ぶ」と述べられている。隋側を不当に刺激しまいとする精いっぱい努力が感じられる。肝心の国書には、「日出る処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙無きや云々」と書かれていた。これが聖徳太子の起草文であろう。とすれば太子は隋に対し、冊封・朝貢、つまり王侯として帝王に服属し、その朝廷に貢ぎを献上するという形式をすて、隣対国としての関係の樹立を宣言したのである。はたして煬帝はよろこばず、「蛮夷の書、無礼なるものあり、またもつて聞する勿れ」と鴻臚卿に命じたという。この煬帝の感覚こそ、当時のアジア外交の常識であつた。かつて、倭王武は、中国の宋から、「安東大將軍倭国王」に封じられていたし、また隋に対しても、高句麗は「大將軍遼東郡公」、百濟は「上開府儀同三司帶方郡公」、新羅は「上開府樂浪郡公」の立場にあり、当時みな隋の冊封体制のなかにはいつていた。そのとき日本だけが朝貢国の関係を拒否したのである。

煬帝が気を悪くしたのは当然であるが、それでもなお煬帝は、日本に返使を送らざるをえなかつた。し

かも隋は、日本の主張をみとめたわけではない。『日本書紀』によると、裴世清が天皇に差し出した隋の国書には、「皇帝、倭皇に問ふ」という書き出しで、「隋帝がみずから徳化をひろめ、これをあまねく世界に被らしめんとするにあたり、倭王は深き心ばえねんごろにして、遠く朝貢を修め、赤心をもつことは嘉すべきである。よつて、鴻臚卿掌客裴世清らをつかわし、その意を指し宣へさせる」と書いてあった。

これは『隋書』にも、「皇帝、徳は二儀に並び、沢は四海に流る。王、化を慕ふの故を以て、行人を遣して来らしめ、此に宣詔す」と、まったく同一の趣旨が述べられている。このとおりの国書だったのであろう。倭王も「裴清」に対し、「われ聞く、海西に大隋礼義の国ありと、故に遣して朝貢せしむ。われは夷人、海隅に僻在して礼義を聞かず」と述べたとあつて、国書の「日出処天子」どころではなく、まさにわれは「夷人」であり、「海隅に僻在」する後進国であるというのである。隋はあきらかに、朝貢関係に固執していたし、日本も支障のない範囲でこれに順応しているのである。

妹子の舞台まわし

だから、妹子が裴清をともなつて帰国の途中、煬帝からの返書を、百済にとられてしまったと述べて、朝廷に提出しなかつたので、朝臣たちは妹子の罪をせめて、流刑にしようとしたが、天皇だけは、この罪を許したと、『日本書紀』に書いてある。それというのも、妹子は、隋の返書があまりにも日本の国書とくいちがっているのです、これをあからさまに取りついたので、国交がぶちこわしになると考えて、故意に失つてしまったと述べたのかもしれない、と多くの学説は解している。さきの煬帝にたいする妹子の口上書といい、こんどの場合といい、太子の意をうけた妹子の舞台まわしはあざやかなものといえよう。もつとも、これ

までの蘇我氏による百濟一辺倒の外交が変えられるのをおそれて、百濟が実際に太子の新外交の妨害をしたかもしれない。

ともかく、このようなくいちがいのまま、日本と隋の外交関係は成立した。日本側も対等の関係を主張しながら、煬帝の国書はそのまま受け取っているのである。これは双方に、この外交を成立させなければならぬという要求があつたからであり、太子の決意もなみなみならぬものがあつたであろう。いつたい、それだけの必要性とは何か。しばらくあとでそれにふれよう。ところで、おなじことは舒明二年(六三〇)、最初の遣唐使犬上三田鉦が遣わされ、翌年、その帰国にさいし、唐から高表仁が来日したときにもあてはまる。『日本書紀』に難波津での歓迎行事までは、裴世清のときとおなじく記されるのに、朝廷での外交儀礼はまったく省略され、直ちに帰国の記事にとんでいる。これは日唐の外交上の主張を調整できなかつたことを示し、『旧唐書』には、日本の使者が「自らの矜持が大きく、実情からかけはなれている」としつつも、高表仁が「綏遠の才がなく、王子と礼を争い、正式の外交を成立させえなかつた」ことを責めている。双方の主張にひらきがありながら、外交の成立を双方とも望んでいることを示すであろう。

さて、六〇八年の遣隋使の国書にも、『日本書紀』によると、「東の天皇、敬みて西の皇帝に白す」と書きはじめられていたという。これを前回の「日出処天子」という国書と混同したものとみる説もあるが、小野妹子が裴世清を送つて、六〇八年にも隋に使用していることは確かなので、このときも信書を携えていたとみねばならず、遣隋使の記事の正確さからおして、このような説はまちがいであらう。太子のたてまえは、ふたたび貫かれたとみるべきであらう。

現実政治家としての太子

さて、聖徳太子の革新外交の経過を以上のようにたどってみると、太子はまさしく、すぐれて現実的な政治家であった。太子の外交を「国威発揚」的にとらえるのがまちがいであるとともに、太子を仏教の創始者であり、『三経義疏』を著わした文化人であることとみて、あまりにも理想主義的で、かつ内向的な人柄であるにとらえることも、まちがいであることがわかるであろう。それには、太子が生前「世間虚仮（せけんこげ）」（現世は真実でなく、むなしい存在であること）と、その妃に語ったことがわざわざいして、現実政治との混同をまねいているのではないか。

もちろん太子は、「権力政治家」ではありえない。しかし太子の時代に対する正確な現状認識と、未来への深い洞察力は、どんな同時代人をも絶していた。蘇我氏の専権を打破するため、まず道を隋との通交と、新羅との友好回復に求め、しかも隋との対等関係を宣言することによって、隋帝国の威力を国内政治にじゅうぶん利用した。外交の成功は、国内諸勢力に対する指導力の強化となり、蘇我氏をおのずから制圧したとみるべきであろう。

太子はけつして、ただ「哲人政治家」とか、「ハムレット」型などという形容で表現されるような政治家ではない。そのようなことばは、太子観を誤ることになりやすい。

平野邦雄『帰化人と古代国家』（吉川弘文館、一九九三年、一八八〜二〇〇頁）